

教育

一般社団法人 現代教育研究協会

会 報

55

題字 榎本頼兼氏
(平成8年～平成20年 京都市長)

発行所
一般社団法人 現代教育研究協会
〒605-0981
京都市東山区本町4丁目131
クリスタルハイツ1F

印刷所 株式会社 洛 陽

だれ一人取り残さない
安全・安心なまちづくり

会 長 梶 村 健 二



〈新型コロナウイルスの影響〉

日頃は現代教育研究協会の活動につきまして大変お世話になっております。

年明けから一月末からの新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、全世界で二十万人以上の感染者がでて、一万人以上の方が亡くなっています。WHOは

三月十一日パンデミックを宣言しました。こうしたことから公立学校の休校や各種大型イベントの休止、遊園地等の臨時休園、観光客の大幅減少、経済面への影響など、大変な状況になってきています。一日も早い終息を願うばかりです。

この新型コロナウイルスの影響を受けて、四月二十～二十七日の間、京都国際会館で開催される予定であった第十四回京都コンGRESS（国連犯罪防止刑事司法会議）が延期になりました。この会議は、五年に一度開催される犯罪抑止・刑事司法分野における国連最大の国際会議

で五十年ぶりに京都市で開催され全世界から約四千人の関係者が集う予定でした。残念ながら今回は延期になりましたが、こうした会議を通して多くの方々に更生保護について考えていただく機会になるのではないかと思っています。

〈更生保護〉

私は現在保護司をしており、京都コンGRESSにも保護司会です。PRブースを出す準備をしていました。会員の皆様にも数名保護司の方がおられますが、ほとんどの方は「名前ぐらい知っているけれど、保護司って何し

ているの」という方が多いのではないのでしょうか。新聞やテレビでは毎日様々な犯罪が報道されています。犯罪件数は減少傾向にあるとは言うものの、残念ながらまだまだ多くの犯罪が起っています。犯罪をした人は裁判の結果、刑罰を受け刑務所で罪を償うなどしてほとんどの人が再び社会に復帰してきます。つまり地域社会の一員として暮らすことになるのです。だけれども安全で安心して暮らせる地域社会を望んでいます。そのためにも犯罪や非行のない社会づくりが求められていますし、犯罪や非行をした人が更生して地域社会の一員としてきちんと生きていくことが大事になってきます。私たち保護司は犯罪や非行をした人の立ち直りを支援し社会の一員として歩みだせるよう援助するとともに、社会から犯罪や非行をなくす取り組みを住民の皆さんと一緒に進めています。以下簡潔に保護司のことに

〈保護司とは〉

保護司は、犯罪や非行をした人の更生保護を担う民間ボランティアで、法務大臣から委嘱された非常勤の国家公務員であり、全国でおよそ四万八千人、京都市内には約五百人います。

保護司の活動には、①保護観察、②生活環境調整、③犯罪予防活動の三つがあります。

①保護観察

月に二、三回程度、保護観察を受けている人を自宅に来てもらったり、あるいは、その家庭を訪問したりして面接を行い、自らの犯罪や非行を反省し、保護観察期間中の順守事項を守るよう指導するほか、就労の援助や本人の悩みに対する相談等を行っています。こうしたことを通して犯罪や非行をした人がスムーズに社会生活に適應できるようにもしています。特に仕事と住まいは社会に復帰するにあたって大事な要件ですので、そのことについてはしっかりと支援します。

②生活環境の調整

刑務所や少年院に収容されている人が釈放されたときに、更生に適した環境で生活できるように、収容中から家族等の帰宅先の調査や引受人との話し合い、就職先等の調整を行うなどして、必要な受入態勢を整えるなどの活動を行っています。

③犯罪予防活動

犯罪や非行の発生を未然に防ぐことを目的として、社会を明るくする運動など様々な犯罪予防活動を実施しています。地方公共団体、学校等教育機関、福祉関係機関、警察等地域における様々な機関・団体と連携して、「講演会」「住民集会」「学校との連携」な

ど更生保護の啓発活動に携わっています。

このような活動を保護司として行っていますが、保護観察が無事終了した保護観察対象者から「これまでお世話になりました。ありがとうございました。これから頑張ります。また何か相談があれば寄せていただきます。」といわれたときや、保護観察対象者だった少年が何年かたつて、結婚して子どももできまして報告に来てくれ頑張っている姿を見せてもらうなどしたとき、保護司としての喜びを感じています。

〈更生保護の今後〉

昨年は更生保護制度が施行されて七十周年で全国的にも様々な催しがなされました。また、犯罪の減少の一方、犯罪をした人が再び犯罪をする再犯が増えていることが全国的に大きな課題となっており、国あげて再犯防止に取り組まれています。京都市でも現在「京都市再犯防止推進会議」が設置され、京都市の再犯防止計画策定に向けて議論が進んでいます。

〈様々な地域活動に〉

保護司の活動を少し紹介させていただきますましたが、地域には他にも自治連や民生委員、消防団、防災、少年補導など多くの重要な活動があります。会員の

皆様にはこうした活動にご参加の方も多くおられるでしょうが、このようなことを通して地域にかかわり、つながりを強めることで、より一層住みよい地域づくりが実現されることは現代教育研究協会の目指すべき方向と同じではないかと思っています。

〈追記〉

四月以降もますます拡大は広がり、全世界で感染者は二百万人、死者は十三万人と報道されています。わが国でも緊急事態宣言が全都道府県を対象に発令されるなど、日常生活の様々な活動はほとんど休止状態になりつつあります。私たちができることは、「うつらない、うつさない」を行動の基本に自らの生活を律していくことしかないのかなと思います。終息までにはまだまだ時間がかかりそうですが、それまでは地域とのつながりも忘れず頑張っていきたいものです。

第一回講演会 令和元年五月二十五日(土)

京都市における児童虐待対応の現状

京都第二児童相談所 所長

飯田 正 明氏

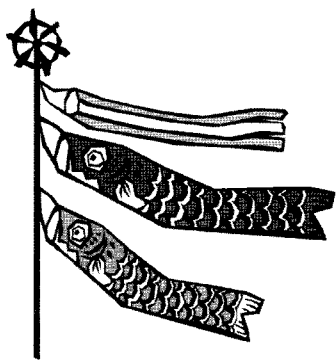


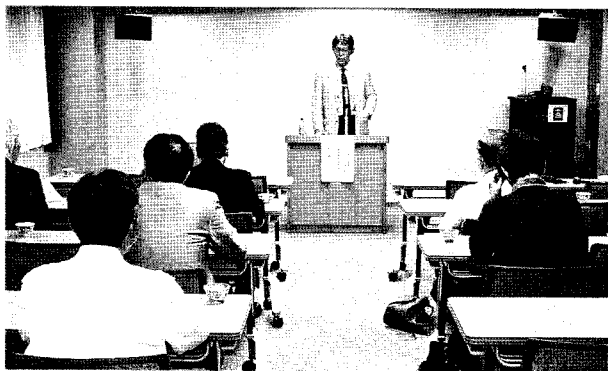
児童虐待について、新聞報道等からの情報によると厳しい現実がある。そこで、現場で実践されている飯田所長から京都市における児童虐待の現状についてお聞きし、私たちがこれから何をすべきか、何ができるかを考える基になればとお招きした。

児童相談所の沿革

児童相談所は、二条城の北にしかなかった。私は今、伏見深草にある改進黨コミュニティセンターの施設を第二児童相談所として使わせてもらっている。その周辺も含めて子供の数が全国的に減ってきている中で、児童虐待件数が増えているという問題が起きている。京都市では、昭和六年九月十五日に児童院を設立し、児童院には産婦人科・小児科・心理部門の機能を持った先進的な取り組みをなされてきた。人材を京都大学に派遣依頼し、アメリカへ留学し研

究を深めることで児童院を創設した。昭和三十一年十一月一日に京都市が政令都市へ権限移譲した事により、児童院内に児童相談所が設置された。当時は非行少年が多く、非行児と自閉症児が被っているのではないかと考えられ、児童院は情緒障害児短期治療施設として国から認可された。その後、乳児院が出来た。昭和五十年頃は、不登校の子供が多く児童精神科医は不登校支援に熱心に取り組まれた。その後、児童精神科医は、不登校そのものよりも背景にある発達障害・自閉症へ関心が移り、視覚支援やソーシャルスキルトレーニングに移り、児童相談所と学校の役割分担が始まり、学校は特別支援教育に力を入れるようになっていった。全国的にみても児童院時代から精神科医が七、八名在籍しているのはまれであり、今も発達支援に重きを置き取り組まれている。昭和五十七年一月十六日児童院が廃止となり、現在の児童福祉センターとして再発足し、総合療育所を新設し児童相談所、診療、療育がそろった形となる。平成十七年四月一日に「非行・虐待防止等子育て支援部門」と「障害部門」として児童相談所の涉外担当部門及び総合療育所並びに知的障害者更生相談所を統合し、発達相談所が新設された。





児童虐待について

児童虐待は、身体的虐待・性的虐待・ネグレクト・心理的虐待に分類される。その中で、身体的虐待が一番多い。最近の警察は、親を逮捕するが起訴せず、すぐに帰宅させるため、その後の対応が難しい。乳幼児揺さぶられ症候群（SBS症候群）は事実の特定が難しく、大阪の裁判所では無罪となるケースがほとんどであり、児童相談所は法的な理論武装に努めないといけないと日々感じている。児童の性的虐待は警察が立件できないことが多く、児童相談所は、子供の証言だけで勝負している。身体的虐待の中で最近のネグレクトは子供の貧困問題がみられる。区役所と相談し支援を受ければ解決するケースが多く見られるが、親が区役所へ行つて嫌な思いを経験すると区役所に近づくなくなるパターンが見られ、自宅へ手紙を投函しても親の反応がない世帯が現れてきている。体罰的なネグレクトで児童虐待死するケースも増えてきた。

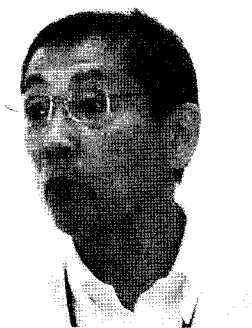
児童相談所では、心理的虐待対応に一番苦労している。虐待内容別件数の推移を見ていくと、心理的虐待が平成二十六年から三十年度に増加している。警察庁が夫婦喧嘩で警官が臨場して、子供が夫婦喧嘩を聞いていたと疑えば、全件児童虐待（心理的）通告すると決められた。子供が児童相談所へ送られてくる件数は膨大に膨らんでいる。その対応をどうしていくか全国的な課題となっている。リスクを見逃すことはいけないが、全部同じように対応していくことは難しく、児童相談所ができることはケースワークと一時保護だけである。新聞報道等では、児童相談所は一時保護に及び腰、対応が遅く、怒鳴つてくる保護者に弱腰などと指摘されている。最近では保護者が弁護士を立てるケースが増えてきていて、保護者からは冤罪だ、直ぐ子供を返してくれないと国家賠償請求をするといわれる。

一時保護所は、世間から見れば一番評判が悪い。子供が自由に出入り出来ない現状や私物の持ち込みをどこまで認めるのか、いろんな判断をしていかなければならない課題がたくさんある。一時保護についての児童虐待相談・通告への対応の流れは、まず児童の安全を確保したうえで、対応することが望ましい場合は一時保護を実施する。課題となる一点目は、児童福祉法では児童相談所所長権限で一時保護が出来るようになっていくが、児童の意思も尊重しなければならぬ。嫌がる児童を力づくで保護することは出来ない。保護中は行動制限を行わざるを得ず、特に就学児は登校させられない。二点目は、親子関係の調整の困難さ、施設入所先の逼迫化（特に中学生以上の女兒）によって保護人数が年々増加し、常時満杯状態に至る。保護期間も長期化傾向にあり長い児童では二、三か月以上もいる。三点目は一時保護所では集団処遇であり、二、十八歳未満の幅広い年齢層かつ被虐待児や非行児も共に生活するため、落ち着いた生活を保障することが難しい。児童虐待通告の児童相談所における対応の流れは、相談・通告受理を受けて、初期調査をする。初回虐待判定会議の中で、A・B判定（危惧又は軽度）かつ児童相談所の直接的な支援が不要と判断された場合は、区役所の主担当機関へ移す。今年度からは、教育委員会生徒指導課主事も実務者会議に入ってもらい情報交換を図り、一歩ずつ各区役所を中心に身近な地域で支援体制を進めている。強制的な支援が必要となる以前にどのような支援やサービスが入れられるか、お母さんへの相談の在り方など出来る所から進めていく体制をとっている。

京都市立総合支援学校の教育と東山総合支援学校の取り組み

第二回総合支援学校見学研修会

令和元年九月十二日(木)



京都市立総合支援学校 校長

田邊 慈 人氏

の卒業生が内閣府特命担当大臣賞に選ばれた。審査委員会から「いつまで見ても飽きない楽しい作品である。独特な構図で密度を上げ、白地に人々の嬉しい表情で清々しいコミュニケーションの世界を描く。(略)今回は相対的に高品質な作品に出会えたのは嬉しいことであった。」高く評価されたコメントをいただいた。

はじめに

内閣府が募集した「障害者週間のポスター」に全国から多数の応募があり、その中から本校

特別支援学校とは

学校教育法改正によって、平



成十九年三月三十一日まで盲学校、聾学校、養護学校に区分された制度は、平成十九年四月一日から特別支援学校に一本化された。学校教育法七十二条、施行令二十二条の三に「視覚障害者、聴覚障害者、知的障害者、肢体不自由者、又は病弱者（身体虚弱者を含む）に対して、幼

稚園、小学校、中学校または高等学校に準ずる教育を施すとともに、障害による学習上または生活上の困難を克服し自立を図るために必要な知識技能を授けることを目的としている」を受けて、特別支援学校学習指導要領は「自立活動」「各教科等を合わせた指導」「専門教科」を柱に取り組みの充実を目指している。総合支援学校には、色とりどりの生徒が通っている。

京都市立総合支援学校

総合制・地域制は北・東・西・呉竹総合支援学校。職業学科は白川・東山・鳴滝総合支援学校。病弱は鳴滝・桃陽総合支援学校、桃陽支援学校には分教室と訪問教育も含む。総合支援学校の職業学科は、昭和六十一年西養護学校で働く生活を目指した高等部の教育（作業

学習）から始まった。背景には長引く経済状況の悪化、受け入れ企業の減少、働くことへの意欲や生活への目当ての希薄、社会全体の風潮、ニート、企業への就職率の及格的な落ち込み（負の連鎖）がある。職業学科では、負の連鎖からの脱却として、産業構造の変化、製造業からサービス業へ、場に応じた対応力やコミュニケーション力、働きたいという強い意欲と意思の育成を目指した。企業就職に特化した新しい教育の創造として、平成十六年白川総合支援学校・鳴滝総合支援学校に職業学科を開設した。職業学科に主として開設される専門教科は、家政科にクリーニング（鳴滝）・食品加工（白河）、農業科に農園芸（白河）、工業科に情報印刷（白河）、流通・サービス科にメンテナンス（鳴滝）、福祉科に福祉介護（鳴滝二十一）、地域コミュニケーション科（東山二十五）がある。

京都市立八校目の東山総合支援学校の開校

地域と共に新たな企業就職への道を目指して開校した。校章には、コンセプトである「地域と共に」成長していく子どもたち、それを見守り支え、共に成長していく、学校・保護者・地域を表現した。また学校の背景に広がる東山の山並みや間近に流れる鴨川の清流、東山に昇る月といった風光明媚な東山の景色をカラーで表現している。地元への愛着をもって、東山の地域の方と共に創っていくという学校という想いが込められている。

学校教育目標には、「人と共に心を磨き、地域と共に笑顔を育てる。歴史と共に未来を見つめ、新しい世界で生きる「人財」を育てる。」（新しい世界で生きる新しい自分を探す）とある。

①人と共に 就労に向けては、人とのかわり、コミュニケーションが欠かせない。その根底にある人を大切に、人に感謝し、慈しみ、人を支えることが出来るような豊かな人間性を育ててほしい、という願いを示すものである。

②地域と共に 地域の方々とともに教育活動をすすめていくこと。学校と地域が一体となった姿を表すものであり、「ありがとう」「おかげさまで」という絆で支えられて自己肯定感を育んでいく本校の教育実践を象徴としている。さらに、生徒が暮らす地域へ、働く地域へと、希望に満ちた空間の拡がりを期待するものである。

③歴史と共に 修道学区の伝統と文化はもとより京都の町衆の教育に対する熱い思い。京都市の総合育成支援教育の百年以上の熱い先人の志、常に新しい挑戦を続けてきた京都の産業の息吹を受け継ぎ、新しい学校を創造しながら、親

や家族が培ってこられた一人一人の育ちを受けとめて、かけがえのない未来をかたち作っていく、脈々と続く時間の流れを表すものである。

東山総合支援学校の教育課程の専門教科「地域コミュニケーション（福祉）」

①食品サービス フォーシーズンズホテル京都との協働による製菓、カフェの営業、学区社協との協働によるふれあいサロン、配給サービスの運営。

②東山サービス 陶芸教室のアシスタント、修学旅行生への観光ガイド。保育園での「読み聞かせ」、茶わん坂ネットワークへの参加。

③コミュニケーションサービス 学校運営協議会による交流農園「ほかはかファーム」の運営、学区社協との協働による健康体操教室の運営。

④養正サービス 図書室管理、養正小学校で読み聞かせ、ようせいカフェ、養正保育所での保育補助、養正寄席の出勤。

修道社会福祉協議会（すこやかサロン）・地域コミュニケーションの意図するところのキーワードは異年齢の人との関わりである。異年齢の人との関わりとは自分と他者とを比較しない関係であり、異年齢だから、互いに安心して受け入れられる。繰り返し関わりを持つ中で、役

目としての責任が生まれてくる(互いに必要とされる存在)。互いに必要とされる中で役割を担う、他者の存在を意識して自分の存在価値を感じる感覚、ありがとうとの感謝、役に立っていることの実感「自己有用感」。輻輳的、相互的に内的な止揚を促す「自尊感情」。自分はかけがえない大切な存在なのだと思いう感覚「自己肯定感」を目指している。そうした取り組みから人と共に、地域と共に、歴史と共に着実に生徒は変わっていつて

共生社会の形成の実現に向けて八校の京都市立総合支援学校の取り組みを紹介していただいた。そして、「東山総合支援学校を今後もよろしく願います。」と結ばれた。

午前中は京都市立東山総合支援学校を訪問して、田邊校長先生から先進的な取り組みのお話をお聴きした。その後には多田教頭先生のご案内で校内の施設見学や生徒の学習活動の様子を丁寧に説明していただいた。研修を終え、隣接するフォーシーズンズホテル京都で昼食会を開き、会員同士の親睦を深めるなど有意義な一日研修会となった。

第三回講演会

令和元年十一月十六日(土)

遠路はるばるニッポンへ —青い目が見たZen—

ネルケ・無方老師氏



ネルケ無方老師は、一九六八年ドイツに生まれ、十六才のとき高校のサークルで坐禅と出会う。将来禅僧になることを夢見て、大学で哲学と日本学を専攻、在学中に一年間日本に留学する。安泰寺に上山し、半年間の修行体験を得てドイツに帰国する。再び安泰寺に入門し修行を重ね三十三才のときに、独立した禅道場を開くために下山し、大阪城公園で「流転会」と称してホームレス雲水生活を開始する。その六か月後の二〇〇二年二月、師匠の訃報を聞き、テントをたたんで山に戻る。安泰寺住職として、雲水と年間一〇〇人を超える国内外の参禅者を指導するネルケ無方老師氏にご講演いただいた。

キリスト教の中で育った私は、教会の中で「愛」という言葉をうんざりするほど聞かされた。「イエスはあなたを愛している」がしかし、そのイエスは遠い昔に死んだのではないかと、疑い深い私は思ったものだ。彼に愛されている実感はどうしても湧いてこない。そもそも本当に存在しているかどうか分からない。「神」をどうして愛せるのか。人を自分と同じくらいに大事にする。それなら、頭でなんとなく分かる。なるほど、人間は皆平等なはずだから、自分を一番だと考えるのはおかしい。しかし、私は子供の頃から、「生まれてこないほうがよかったのでは」と思っていた。つまり、自分すら愛せていなかった。自分も愛せないのに、隣人が愛せるはずがない。「愛している、愛してくれ、愛しよう」という宗教は、私の問題に答えてくれなかった。同じように感じる日本人もいるかもしれないが、多くの欧米人は「仏教は暗い」という。諸行無常といい、一切皆苦といい、あま

りにもネガティブな教えた。でも私は違っていた。「すべては苦だ」と言う釈尊に、一よくぞ言ってくれた一と言いたかった。生死は苦だと喝破した釈尊は私の最初のソウルメイトとなった。自分自身が嫌いなのに、どうして人類を愛せるか? まず自分の問題を解決しないで、どうして世界の問題が解決しうるのか? 釈尊のように自分の苦しみと向き合い、その原因を突き止めたかった。原因さえわかれば、歯医者や虫歯を抜くように私も苦しみの世界から解脱できると思っていた。

十六歳から坐禅をはじめ、二十二歳で安泰寺にたどり着いた。そのころ、仏陀といえは歴史上の釈迦牟尼仏という知識しかなく、日本仏教に様々な如来が拝まれるほか、多くの菩薩も信仰の対象にされていることに驚いた。「東司(とうす)」と呼ばれる禅寺のトイレに至っては、烏枢沙摩明王(うすさまみょうおう)というインドの神様まで祭られている。

「キリスト教にはイエス・キリストのほかに神がないが、仏教にはあらゆる仏や菩薩がいるようだ。ところで、安泰寺の本堂に

ある仏は何ブツでしょうか」入門当初のころ、住職に聞いてみた。「本堂の仏なんか、誰でもいいじゃないか。お前自身がここで仏にならなければ、どこを探しても仏は見つからないぞ」この答えに驚いたことはもちろんだが、納得するような思いもした。「そうか、仏教においては俺が主役か」禅寺では坐禅や読経のほか、台所の仕事も大事な修行の一つとされている。典座(てんざ、禅寺の台所の責任者)は喜心・老心・大心を料理という形に変えなければならぬ。初めて料理当番に当たった時、乾麺の頂きものがあつた。「これでお昼にうどんを作ってみなさい」と先輩に言われたが、ドイツにはうどんというものがない。スパゲッティ・アル・デンテのつもりでそのうどんを湯がいてみたら、食後に「硬すぎ」と指摘された。翌日は、同じうどんを柔らかくしてやろうと思ひ、



三十分ほど湯がいた。鍋の中で完全に溶けてしまった。「どうせ、胃袋に入れば同じことだ」と言い訳しようとしたが、「なんとお粗末なこと、これでも修行しているつもりか」と頭ごなしに怒られた。毎日、料理ばかりのことで怒られていたものだから、つい反論してしまった。「僕は何も、料理の勉強をしに日本に来たわけではない。仏教が知りたい。自分の人生問題を解決したいのだ」それを横で聞いていた住職は大きな声を出した。「お前なんか、どうでもいい」主役であるはずの私のことが、どうして「どうでもいい」と言われなければならぬのか、その時はさっぱりわからなかった。

典座の修行もさることながら、坐禅も大変だった。安泰寺では毎月、接心という集中的な修行期間がある。普段は坐禅を一日、四時間行うが、接心の間は五日間続けて、朝の四時から夜の九時まで無言で坐りっぱなし。頑張れば、一日目は何とかクリアできても、二日目から地獄が始まる。足も痛ければ、腰も痛い。ジーンと壁を見つめれば、様々な思いが頭をよぎる。「どうして、ここでこんなことをしているのか？ ドイツに帰って、まともな職を手につけたほうがよいのでは」なにせ、坐禅しても何もしないという住職の一喝が耳に残る。何もならない坐禅のために、ここまで苦しい思いをし

なくてはならないのだろうか。しかし、このままドイツに帰っても、私はただの負け犬。私の問題がここで解決されなければ、どこへ行っても、永遠に解決されないだろう。どうしてか、この確信だけが私を安泰寺に留めてくれた。それにしても、坐禅の痛さは半端ない。二日目が生き地獄なら、三日目は死んでしまふのではと本気で思ったことは何度もある。四日目はまだ先にある。「今がこんなに苦しいなら、明日の今頃は耐えられない」そういうときは、歯を食いしばって百まで数えてみたり、住職に気づかれないように静かに足をうごかしてみたり、何とかしてごまかしてみた。ところが、ごまかしの接心を何回やっても、残るのは自己嫌悪のみ。どうせやるなら、本気で坐禅がしたい。しかし本気でやっても、そこには三日目という見えざる壁が立ちあがっている。住職に聞けば、何らかのアドバイスをもらえるのではと期待した私がバカだった。「接心の最中に死にそう。心配するな、安泰寺の墓場にはまだ十分スペースが開いている。お前が死んだら、わしがお葬式をしてやる」笑えないジョークだった。だが、次の接心で住職の言葉を信じることにした。「いざというときには、坐禅中に死ねばよい。どうせいずれは死ぬだろうから、この美しい山の中で自分のお墓を立ててもらおう」

そういうあきらめに近い気持ちになった瞬間、坐禅は楽になった。もう歯を食いしばる必要はない。痛みから逃げる必要もない。このまま死のうとしたその時、不思議な気持ちになった。「私は生きている。いや、命が生きている。今まで私が頑張っていた坐禅をしているつもりだったが、この間ずっと、坐禅が私に坐禅をさせてくれていたのだ」自分を手放しにしたその時、鼻の先にぶら下がっていたニンジンが消えていた。長い間、求めていたものを掴んだのではない。むしろ手に入れようとしていた答えは、私を超えたところにあることに気づいた。私がそれを掴むのではない。私はすでに、それに掴まれていたのだ。

世界からの解脱を探し求めていた私が、世界という我が家を発見していた。自己を振り所とすることは、全世界を振り所とすることであつた。この時から、世界は好きになり、生きることには抵抗感がなくなった。自分だけの問題を解決しようとしていた私は、この「自分だけ」という思いこそ問題だったことに気づいた。そこさえ手放せば、問題はどこにもない。そして今はわずかながら、同じ世界で共に生きている他者に対して、いたわりの心が芽生えた気がする。人の「苦しい」という声は、今の私にとって他人事ではなくなっている。

歴史学は、年月日の書いてある古文書が第一次資料で大事になる。明智光秀は、本能寺の変で謀反人と烙印を押され、確実に

な資料や記録がほとんど消されて無くなっている。明智光秀は美濃の国守護に次ぐ守護代らしいの国人領主で、土岐一族の人である。土岐氏は斎藤家(守護)と同じ系統で、江戸時代になって土岐一族の中で生き残った人だけが系図に残っている。特に明智の名前がつく人は江戸時代に全部消されて残っていない。明智光秀やその娘玉子のことを明らかにしていくには、記録類の中でも「信長公記」(註 織田信長の左筆、太田牛一著。のち豊臣秀吉に仕える)は古文書と対応していて信頼される記録といわれている。そういうものを辿って、果たしてどういうことが言えるのか研究してきた。NHK大河ドラマ(麒麟がくる)で取り上げられるといろんな所でいろんな事実が解ってきてこれからも面白くなってくる。

1 明智玉子の誕生

玉子の誕生は永禄六年(一五六三)である。この時代の女性の記録(誕生)はないが何故分るかという細川忠興と結婚し



京都橘大学名誉教授
田端泰子氏

明智光秀とその娘ガラシヤ玉子

第四回講演会 令和二年一月二十五日(土)

た際に同じ年齢と『細川家記』にあり、古文書と対応している信頼される。玉子は明智光秀と妻(妻木範熙の娘、土岐氏一族)との間に四女として生まれた。この頃の光秀は朝倉氏に仕えていたと推測される。私は「生まれたのは越前だ」と思う。江戸時代の前半にできた『明智軍記』(系図より信憑性がある)に母の人物像が「賢女の名のある人なり」と賢い人とある。

2 織田信長の重臣明智光秀

光秀が古文書に出てくるのが永禄十一年(一五六八)信長の家臣で「奏者」(註)室町時代以降、武家で関白・将軍に取り次ぎをする人)として岐阜城で足利義昭と信長を会見させ手を結ばせる。「奏者」光秀と細川藤孝が尽力(仲介)して、細川藤孝は勝龍寺城を回復する。

。永禄十二年、信長の軍議に参加したのは、丹羽長秀・木下藤吉郎と明智光秀である。

。元亀元年(一五七〇)八月九月に信長は約束を破り浅井・朝倉を攻める。『浅井三代記』に信長を「表裏の大将」と呼び、『浅井軍記』には「約束破りの大将」と書いてある。後の本能寺の変にかなり関わっているのではないか。

。元亀二年九月、信長は比叡

山(室町時代に守護の代わりに税を徴収)を焼き討ち。この結果、光秀は近江国滋賀郡を拝領し、坂本に本拠地を置くがそれは辛いことである。光秀は、信長に非常信頼され京都と坂本を管轄する。坂本城を造り坂本の復興に尽力している。

。元亀四年(天正元・一五七三)、浅井・朝倉氏滅亡。信長は細川藤孝に「桂川西域」(勝龍寺城あたり)を与え、羽柴藤吉郎秀吉に江北(こほく)を与える。

。天正二年(一五七四)正月十七日、『細川家記』に「御饗応」の席で信長は婚姻命令(明智家と細川家)し、光秀を「西国征将」と宣言した。この宣言もまた、以後の信長と光秀の関係を暗示する興味深いものである。

。天正四年、信長は安土城普請を始める。

。天正五年、光秀は根来・雑賀攻め、松永久秀(大和信貴山、多聞山城)攻める。信長は光秀に丹波再征を命じる。

。天正六年、信長は大坂(大坂本願寺一向宗)攻め、特に光秀は丹波・播磨へ出陣する。

。天正七年、光秀は波多野氏を制圧し、兄弟三人の身柄を安土城へ送る。信長は三兄弟を磔に処す。『細川家記』に光秀・藤孝憤るとある。天正八年、大坂から本願寺が退き、秀吉は、播磨・但馬を平定し終わる。この年の「佐久間折檻状」(信長の重臣)文書に信長は光秀を真先に褒め、二番に秀吉を褒めている。光秀は丹波天寧寺に諸役免除の特権を与え、坂本城改修に着手。文書によると大和国の寺社本所・国衆は光秀に指出

。天正九年(一五八一)光秀は、信長に京で馬揃えを命じられ奉行を務め三番で進行している。この頃の光秀は信長の一番中心的な位置に座って行事を手伝わされていたことや丹波の領国支

。天正十年五月十五日、十七日の間、武田氏との戦が一段落した後、光秀は信長に家康の「振舞(接待)」を命じられる。十七日には信長から先陣として出発を命じられ、坂本城へ向かうが直ぐに出陣できるわけがない。六月一日『明智軍記』に光秀は愛宕神社で連歌会をして明智左馬助、次右衛門、藤田伝五、斎藤内蔵助利三(春日局の父)らと談合し本能寺へ向かう。信長最後の言葉は「勝者必滅」と『惟任退治記』(秀吉側が作った)や『信長公記』には、「是非に及ばず」とあり、内容が似ている。六月十三日に明智光秀死去し、明智一族は坂本城で滅亡する。

。天正七年、光秀は波多野氏を制圧し、兄弟三人の身柄を安土城へ送る。信長は三兄弟を磔に処す。『細川家記』に光秀・藤孝憤るとある。天正八年、大坂から本願寺が退き、秀吉は、播磨・但馬を平定し終わる。この年の「佐久間折檻状」(信長の重臣)文書に信長は光秀を真先に褒め、二番に秀吉を褒めている。光秀は丹波天寧寺に諸役免除の特権を与え、坂本城改修に着手。文書によると大和国の寺社本所・国衆は光秀に指出

配に邁進していたと最近では特に言われている。天正十年五月十五日、十七日の間、武田氏との戦が一段落した後、光秀は信長に家康の「振舞(接待)」を命じられる。十七日には信長から先陣として出発を命じられ、坂本城へ向かうが直ぐに出陣できるわけがない。六月一日『明智軍記』に光秀は愛宕神社で連歌会をして明智左馬助、次右衛門、藤田伝五、斎藤内蔵助利三(春日局の父)らと談合し本能寺へ向かう。信長最後の言葉は「勝者必滅」と『惟任退治記』(秀吉側が作った)や『信長公記』には、「是非に及ばず」とあり、内容が似ている。六月十三日に明智光秀死去し、明智一族は坂本城で滅亡する。



3 玉子の婚姻と青龍寺城時代、味土野時代

。天正二年(一五七四)正月、信長の命令で明智家と細川家は「縁家」(婚約)を結ぶ。天正六年(一五七八)青龍寺城で細川忠興と婚姻、信長の命により八月に祝言、九月に結婚。数え歳十六歳の夫婦が誕生と『細川家記』にある。この頃の玉子は幸せな時代であった。

。天正七年、長女長を生む。
(のち、豊臣秀次の家臣前野長重に嫁す)

。天正八年、長男忠隆を生む。

『明智軍記』にこの頃の玉子は「容色」ことに麗しく、糸竹呂律の「遊びも妙」「一入最愛の嫁」(藤孝にとつて)とあり、これは事実であると思われる。

。天正十年本能寺の変、この時光秀は細川藤孝・忠興父子(天正九年から丹後宮津城にいた)を誘うが断れる。

逆に波多野氏、一色氏、矢野氏ら味方(光秀に人望があった)につく。細川家は玉子を味土野に幽閉(離婚)する。清原いとや小侍使らの女房、一色宗右衛門ら側につく。この時の玉子の歌が「身をかくす 里は吉野の奥ならか 花なき峰に呼子鳥なく」とある。

。天正十一年、玉子は次男興秋を生む。興秋は後にキリシタンになる。

4 大坂の細川邸と丹後宮津を往復した玉子

。天正十二年(一五八四)豊臣秀吉が再婚を許し、玉子は宮津に帰る。

。天正十四年(一五八六)玉子は宮津で三男忠利を生む。八月秀吉は九州征伐(薩摩島津氏を征伐)の動員発令。天正十五年以降に夫の留守

中、大坂の細川邸から玉子は教会へ初めて行く。ここから先は、キリシタン資料『ルイス・フロイス日本史』によると玉子の人物評は「いとも品格あり、才幹に恵まれた領主夫人」であったが、心の中には仏教(儒教)の教えに対する「躊躇」や「疑問」が次々と生じていたので「彼女の靈魂は深い疑惑の暗闇に陥っていた」また、コスメ修道士(日本人)の見た玉子は「実に繊細な頭脳の持ち主であつた」「多くの質問を修道士に持ち出し、さらに靈魂の不滅性、その他の問題について禅宗の幾多の權威をふりかざして反論を試みた」(教養を全部動員してキリシタンの教えに反抗した)「自分(コスメ修道士)は過去十八年間、これほど明晰かつ果敢な判断ができる日本の女と話したことはなかつたと漏らしたぐらいであつた」。この時代の玉子は、秀吉から外出禁止中のため、清原いとが洗礼を受け、ついで邸内で清原いと(マリア)から玉子は洗礼を受ける。「新たな改宗方法で受洗した貴婦人」(丹後国主の奥方「ガラシャ(温情と訳される)」が誕生する。玉子の内面、外面に大きな変化。それまではうつ病に

悩まされていて、洗礼を受けた後は性格が変わり快活になったとフロイス日本史に書いてある。

5 関ヶ原合戦と玉子の最後

。慶長五年(一六〇〇)二月

忠興は家康側につき、杵築(九州)六万石を拝領する。

忠興、忠隆(長男)、興秋(三男)や興元は宇都宮、江戸へ、重臣は杵築、玉子は大坂の屋敷、藤孝は田辺城(宮津)と勢力が分散させられる。その間は手紙でやり取りしていた。

。七月十七日玉子自害、屋敷は火災、家臣も殉死する。玉子の辞世の句「散りぬべき 時しりてこそ世の中の花も花なれ 人も人なれ」江戸時代になって細川家は、玉子の死を「義死」と称える。

6 玉子の遺言

「子供のことは、私のために子であれば、忠興のための子であるから、改めて言うに及ばない……(中略)……この上、言わずもがなのことながら、側室『藤』を正室代わりにされることはないように」(「於しも(女房)覚書」)当時の日本は、一夫多妻制や一夫一婦多妾制であった。キリスト教世界の「一夫一婦制」のよさを初めて認識した日本女性

8

関ヶ原合戦後の丹波・丹後。藤孝は田辺城籠城するが開城後、十月大坂で家康と謁見する。

。家康は十一月、忠興に豊前一国と豊後国二郡の旧領を与え九州へ左遷する。そのため、宮津を去り中津城に入る。

である。その一〇〇年後ヨーロッパ(ハプスブルス家宮殿)で信仰を守って自害した女性として劇化されている。日本側の資料をもとに考えるとガラシャの思いは別のところにあるのではないか。

7 ガラシャの思いを引き継いだ人々

。玉子の次男興秋は、味土野で生まれたためガラシャの影響を受けキリシタンになる。のち忠興の弟の興元の養子となり、翌年(一五九五)キリシタンになる。大坂の陣で豊臣方として戦い捕えられ切腹する。

。忠興自身もガラシャの入信を理解し、ローマ字印を書状に押している。(年末詳卯月二十七日付)後に弾圧に転じるが、高山右近の追放処分(同情を寄せている)はたたえている。

。藤孝の正室も受洗し、マリア・光寿院の名前を持つている。

。丹後は有馬豊氏に与えられ、丹後は京極高知に引き渡される。(一六〇〇年十二月)

ガラシャ玉子は波乱の一生を終えた女性である。

【註】は、編集者が挿入した。

興味のある方は、田端泰子著『細川ガラシャ 散りぬべき時知りてこそ』ミネルヴ書房二〇一〇年をご参照ください。

編集後記

今年度は、一日研修会を実施し、京都市立東山総合支援学校を訪問して田邊校長より先進的な取り組みをお聴きしました。その後、昼食会で会員同士の親睦を深めることができました。

講演会は三回実施、一回目は喫緊の課題「京都市の児童虐待対応の現状」について飯田所長から学び、二回目にドイツ生まれドイツ人ネルケ・無方老師が体験した日本仏教、三回目は三年連続、田端泰子氏から中世武家社会を逞しく生きた女性について興味深く学ぶことが出来ました。

今年度も会員の皆様のご支援・ご協力のもとに取り組みが実施出来たことに感謝します。